

人麻呂作献呈歌における枕詞

今 井 昌 子

1

枕詞は序詞とともに、わが国の古代文学、とりわけ「万葉集」を中心とする和歌における修辭の特色のもっとも顯著なものの一つであるといわれる。したがって、枕詞および序詞に関する研究がかなり古くから重ねられてきているのも理由なしとはしない。しかしながら、枕詞研究の代表的労作である福井久蔵氏の「枕詞の研究と釈義」あるいは、生田耕一氏の「枕詞研究史の第一頁」^①などの枕詞研究史についての検討がすでに明らかにしているように、多くの研究は枕詞の本質を十分につきとめてはいないようにならざるを得ない。

福井氏は、上記の研究において、「次の詞を引き発すといひ、他に飄ふるといふは性質説にして、調を整ふといひ、詞の装をなすといふは目的説と称すべし。婉曲の表出の爲といひ、座興を助くといふが如きは効用説と名づくべし。」と要約して、「各見る所ありと

いへど一方に偏したり」と論断した。けれども、「上半は通常五音節より成り下半の爲に従属の地位に立ちて、或はその修飾となり、或は声調を助け」という、福井氏の所説そのものが折衷論の域を出てはいなかった。声調説といい、修飾説というも、結局は、形式を主とするか、内容を主とするかの視点の違いにすぎない。これまでの枕詞の研究は、まさに、「文献に現れた諸例を並立的・固定的に見るにとどまり、その生成と変化に対する歴史的な観点を欠いて居り、真の意味の発生的見解と言ふことができない。したがってこれらの特殊な修辭現象の表面的な解釈にとどまり、その背後にある古代人の生活と心意の表現として、これを内面的に深く捉へることができなかったと思はれる。」^②という批判は正しい。そのことは枕詞研究史上画期的な福井氏の「枕詞の研究と釈義」についても例外ではない。枕詞の研究にあたって、いわれるごとく、古代人の生活と心意にかかわりながら、生成と変化の過程を解明することより

論を進めなければならないとして、そのような展開は、ひとり枕詞のみならず、それが主として用いられた古代の和歌の世界の全容そのものにかかわっていくべき性質の問題ではなからうか。したがって、枕詞の本質の追及のためには、枕詞の個々の原義に関する語源の解明、あるいは、一对の固定的な修飾語と被修飾語である枕詞と被枕の結合のありかたに関する考察とともに、歴史的に推移する枕詞の生成基盤とそこにおける機能的側面を重視する方法もまた求められなければならない。

右のような認識の上に立って、本稿では、柿本人麻呂の作とみられる歌における枕詞を対象としてとりあげることにした。

2

「万葉集」において人麻呂作とされる多数の歌の中でも、殯宮を中心とする荘重な礼典における歌であれ、行幸の場にあつての歌であれ、何らかの形をもって宮廷へ献呈されたであろうという成立事情を推測させるものがある。人麻呂の歌作の重要な基盤がそれら宮廷献呈歌に認められよう。しかもそれら献呈歌とよぶものはそれぞれに多様な枕詞を含んでおり、ここに、人麻呂の枕詞形成を促した基本的な要因とその特質をうかがうことができる。そこでまず殯宮時献呈歌を中心とする皇族を対象とした挽歌と、従駕歌を中心とす

人麻呂作献呈歌における枕詞

る雑歌など献呈歌とみられる歌において用いられた枕詞を示すと、第I表・第II表の如くである。

左の表に明らかなごとく、人麻呂作献呈歌における枕詞は、特定の、呪的祭儀的ないしは政治的にみて、尊崇し頌徳すべき対象について用いられている。これらの用法に共通するものとして、その頌徳的機能をみることができよう。今、これを「頌徳的枕詞」とよぶことにする。

人麻呂献呈歌の枕詞における頌徳的機能は、枕詞の伝統的発想形式に連なっていく性質のものである。もともと枕詞は、そのよつてたつ語義が知られるものであれそうでないものであれ、特定の地名などの対象に対する、したがって固有名詞に対する伝統的慣用的な讚美的機能を第一とすると考えられる。枕詞はそれを必然的に想起せしめるところの対象、いわゆる被枕の特質によって規定されるもので、ヨゴトの系譜に始源する讚め詞としての呪術的機能に端を発するとも考えられるのである。人麻呂の枕詞もこのような伝統的な発想をぬきにしては考えがたく、その作歌においても人麻呂以前から用いられている伝統的枕詞を重視しているようにみえる。

しかしながら、人麻呂の時代にはすでにヨゴトの機能は変質していた。「本来的な『よごと』は、生命・建物などの呪言としての性格の強いものであったと思われるが、しだいにそれはヤマト王権へ

第I表 「雑歌」部献呈歌の中にみられる枕詞

呪的宗教的事象				天皇・皇族				皇都・国土・地名				伝統的枕詞					
暈づく	〃	〃	ひさかたの	高輝らす	〃	高照らす	〃	〃	〃	八隅知之	天離る	〃	百磯城の	空みつ	あをによし	隠口の	泊瀬
青垣山	〃	〃	天	日の皇子	〃	わご大君	〃	〃	〃	わご大王	夷	〃	大宮	大和	奈良山		
38	261	240	239	261	239	45	38	261	239	45	36	29	36	29	29	29	45
長	長	反	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長歌
												伝統的枕詞の改変		人麻呂創作枕詞			
												御心 ←長田国 御心を ←吉野の国 そらみつ ←大和 天爾満 ←大和 玉禪 ←懸のよろしく 玉禪 ←畝火の山		神功紀 石走る 淡海の国		桑浪の 大津宮 桑浪の 志賀	
												29 長		5 長		29 長	
												36 長		記71 72 97		31 短	
												29 長		30 長		29 長	

呪的宗教的・政治的被枕に冠するもの

(文献上、人麻呂初出と思われるものを「人麻呂創作枕詞」としてとり扱う)

の従属の誓いに変貌していったのである^④といわれているところである。枕詞の形成される歌そのものも古代的心性とその表現への志向に支えられた言語行為としての呪的祭儀的機能に発しながら、すでに宮廷の政治的な要請に奉仕するものへと変容をとげていったといえる。

人麻呂の従駕歌にみられる枕詞は、かつて国讃めの頌辞的機能にもとつきながら、歌そのものの内実の変化と結合して形成される。国見は、かつて、「見

第II表 「挽歌」部献呈歌の中にみられる枕詞

呪的宗教的・政治的被枕に冠するもの

呪的宗教的事象	天皇・皇族	皇都・国土・地名	
ひさかたの 天の河原	高照らす わご大王		伝 統 的 枕 詞
天つ御門	日の皇子		詞
167 反	167 長		
168 反	199 長		
199 長	199 長		
200 反	199 長		
	さす竹の さす竹の	飛鳥の 飛鳥の 飛鳥の	伝 統 的 枕 詞 の 改 変
	君←皇子	浄御原宮 明日香 浄の宮	
	紀 104	167 196 194	天 武 紀 下
	長 長	長 長 長	
	さしのほる 日女の命	玉垂の 越智 御食向ふ 木庭之宮 あさもよし 百濟の原 言さへぐ 和豊が原 高麗劍 吾妻の國 鶏が鳴く	人 麻 呂 創 作 枕 詞
	167 長	199 199 199 199 196	195 194 反 長

歌するにあたって、呪術的性格をもった伝統的な讃め詞、とりもなおさず枕詞を用いたとみられるのである。

しかしながら、人麻呂の枕詞はその形式においては伝統的な発想

ることの呪術的意義」にもとづいて春の初めに広く行なわれた予祝行事であった。それが天皇の国見となるにおよび、一面では支配者の儀礼としての政治的性格を帯びることになった。さらに、人麻呂の時代においては恒例行事としての国見が宮廷で行なわれたという証左はなく、それにかわって、天皇の行幸に際して国見が行なわれたようである。その従駕の際に人麻呂は作

をふまえながら、その実質においては政治上の新たな目的に合致するものに変質していったといえる。そこに形成された枕詞は、国讃めの脈絡のなかに機能の基盤を置く伝統的な慣用語を中心としながらも、場の性質の変化にともなうて、より多様により自在に用いられているのである。吉野の地に対する「御心を 吉野の国の」などの用法ひとつをみても、伝統に立脚しつつそれを改変して新しい意味をもちこもうとする人麻呂の独創性が認められるのである。「御心を 吉野の国」(卷一、三二〇)は、吉野を讃めたものであるが、土地の属性を言うよりもむしろ、その行幸が三十六回にも及んだといわれていることから推察されるように、「天皇(持統)が御心を お寄せになる吉野の国」であり、天皇の行為そのものを主体にして生み出されてきた新しい発想の枕詞であるといえよう。

人麻呂が献呈歌に伝統的な発想による枕詞を多用することによって、対象への尊崇と頌徳の意と、歌そのものの格調にとつての儀礼的狂重さをもたらそうとした。しかし、その枕詞の実態において、人麻呂の位置からする再創造が加えられているのは右の事例によっても明らかである。このような人麻呂による伝統の再生は、枕詞と被枕の結合を慣用的な固定性から脱して、全く新たな関係として形成する。のみならず、従来にない枕詞をも被枕の求めるままに自由に創作することさえしているのである。そのことは雑歌においても

みうけられるが、挽歌にいたっては、後に触れるごとく、殯宮時献呈挽歌それ自体の成立事情とあいまって、伝統的なものよりも、むしろ人麻呂創作とみられるものの方が多いぐらいである。人麻呂献呈歌における枕詞の形成の特質がその点にあるといえる。

そのような伝統的なものの再創造を基本とする人麻呂枕詞形成の中軸は雑歌と挽歌の両部立にわたりつつ、人麻呂が五回にもわたって、その長歌の冒頭にうちすえた、伝統的な枕詞「やすみししわご大王」についてみるときに知れよう。この枕詞は、吉野讃歌、高市皇子殯宮挽歌あるいは軽皇子従駕の歌など多様に用いられており、人麻呂はそれらに、「八隅を知らしめず」か「安らかに見そなわす」の語義をもたせることによって自らのものとしたのである。

もともとこれらの枕詞はその語義がそのようなものであったかどうかにかかわらず、古代王権讃美の固定的・慣習的讃め詞としての機能そのものにおいて求められたのであろう。それが人麻呂において彼の奉仕する天皇への枕詞として新たな意味を有することになるのである。そしてそれはやがて、「高照らす 日の皇子」という称辞をもあわせて用いることになるのである。阿蘇瑞枝氏は「『やすみしし わご大王 高照らす 日の御子』の詞句を用いる歌は持統朝に集中して」おり、「本来、伊勢の日神信仰を背景として生まれた讃辞であったのである」と説かれた。まさに、そのような時代固有

の精神と結びあつて、人麻呂献呈歌にみられる枕詞は、伝統的なものであれそうでないものであれ、新たな宮廷政治にかかわる「頌徳的機能」において形成されたのである。この点に人麻呂における枕詞の第一義的な特質があった。そのような人麻呂の枕詞の特質は、さらにそれが形成された場の考察を通してより明らかにするにちがいない。

3

人麻呂における枕詞の形成は、それを含みこむ歌そのものの制作事情と不可分の関係にあることはいうまでもない。人麻呂における枕詞の第一次的な形成は、他ならぬ持統統治下での歌群のうちにあつたといえよう。そのことは、特に挽歌の部立てのもとに収録された殯宮献呈歌について顕著にうかがえるのである。挽歌が具体的にいかなる場において献呈されたのかは必ずしも明らかではないけれども、人麻呂がそれぞれの殯宮の時に、宮廷での葬送儀礼と何らかの形で結びつくものとしてこれら殯宮挽歌を献じたものである。しかも「万葉集」巻二から始まる挽歌の採録にあたつて、人麻呂が主として作歌をした藤原宮御宇天皇代の期間の挽歌は一五の歌群のうち、八群までが人麻呂作歌の詞書を有するのである。のみならず、これら人麻呂作殯宮挽歌はそれ以前のものとその長大な結構と反歌

人麻呂作献呈歌における枕詞

人麻呂殯宮挽歌		人麻呂以前の挽歌		歌の番号	全句数	枕詞の句数
一九九	一九六	一六七	一九四	一五三	一三三	〇句
			二九句	一五五	一三三	二句
			七五句	一五九	一五句	二句
			二〇句	一六二	二二句	二句
			六五句		二〇句	四句
			二九句		二〇句	八句
			七五句		七句	七句
			一四九句		二二句	二二句
					一九句	一九句

をとまなうことで相違する。人麻呂作殯宮挽歌のなかでも長歌について比較してみると右の如くなる。

日並皇子殯宮挽歌に代表される長歌には句数の長大化と、それに呼応するように枕詞の使用がきわだつて多くなつてきている。しかも、そのうち、「春花の」「天つ水」「望月の」などは、人麻呂作歌に初出する枕詞である。このような殯宮時献呈挽歌には、人麻呂作歌の事情と主想の基盤が存しているといえよう。とりわけ、「形の上からだけでも、挽歌が、第二期たる持統文武朝に開花し、その主役に人麻呂が立つことが明らかである。」とすれば、そのことかわかつて人麻呂における枕詞の多用の理由とその本質が明らかにな

るであろう。

人麻呂の枕詞の形成をもたらした献呈挽歌が皇子・皇女についてものに限定されていることについて、「人麻呂が天皇に近づきえたのは、皇子を通してのみだったのではないか。」とみることもできようが、より重要なのは、人麻呂の献呈挽歌が皇子・皇女に集中していることの意味とそれをそうさせた要請がいかなるものであつたかということである。

このことは、挽歌を献ぜられた皇子皇女たちが、その身分のゆえのみではなく、その出自に共通性を有している点により基本的な問題があるといえよう。すなわち、「神の命と 天雲の 八雲かき別きて 神下し 座せまつりし 高照らす 日の皇子」であり、「神ながら 太敷きまして やすみしし わご大王」と称される皇子たちである。まさにこれら枕詞の多用によって讚美するのは、いうところの「現人神」についての表現に他ならない。しかもこれは、「壬申の乱後のある期間に集中的に現われるのであり、(中略)すなわち、現人神の思想は天武天皇を中心として形成されたのであり、その契機としてはふつう言われるように壬申の乱が考えられるのである」という。人麻呂が殯宮挽歌を献じ、あるいは従駕歌を奉ったのは、このような皇子とそれと関連する皇女たちであった。とすれば、このことには人麻呂の宮廷における作歌の範囲とその目的がこ

められていると考えられるのである。すなわち、壬申の乱の天武の勝利に始発する権勢を継承し確立しようとする持統天皇の政治目標と、現人神思想にうらうちされた皇族に対する挽歌の献呈はかかわりあっているのではないか。

殯宮挽歌の文献上の初出は、天武天皇と持統天皇との間の唯一の皇子の日並皇子に対するものであった。その際、献呈された挽歌は死者の靈魂を鎮魂する目的を有しているとはみえない。あるいは遺された者の悲哀を詠ずるということをせず、「皇子の宮人 行方知らずも」というにすぎない。そして、死もまた「真弓の岡に 宮柱太敷き座し」という間接的な表現にとどまる。そして、「天地の初の時」以来の神話的形態をもった皇統譜と「飛鳥の 浄の宮」の治政を讚美することに挽歌の過半は占められている。「万葉集」中の最大の長歌である「高市皇子尊城上殯宮之時」挽歌もまた、尊崇されてきた太政大臣高市皇子薨去の公的儀礼的な哀悼と、愛孫軽皇子即位への期待との入り混じるなかに営まれた荘大な葬祭の時の作である。この挽歌は、高市皇子にふさわしく多くの枕詞を含む最大の長編的結構を有しつつ、つまるところ、持統天皇から軽皇子へと継承されていくべく、天武天皇の偉業を讚美することを主眼とし、その事跡の一コマに高市皇子を描き出すという発想をもたらしたのである。かくみてくるならば、吉永登氏が人麻呂作殯宮時挽歌の考察

を通じて提起する、「筆者の企図したところは、人麻呂の献皇挽歌が常に天武持統系の皇子皇女に対して作られているということ、死者を直接悼むというよりは、むしろ生き残っている権力者に気を配って作られているということとの立証にあった。(中略)しかも、これら皇子がかの天武八年の吉野の盟の場に出席した六皇子の範囲を出ていないことは単なる偶然と考えてよいだろうか」という見解は正当であるといわなければならない。

人麻呂の枕詞形成の場となった持統朝と終始を一にする長歌群、ことに殯宮時献皇挽歌の特質をみきわめようとしてきたのであった。かつて、北山茂夫氏は「現御神」としての天皇を頂上とし、その専制として構想された官人的全秩序を強化することが、とりもなおさず全国の豪族、公民にむかって更新された支配力を浸透する第一歩であり、外にむかつては、唐、新羅に対して国威を示すことになる。かくして、宮廷の諸典礼が問題になってきた」と述べた。人麻呂は天武・持統・軽皇子の皇統の連続と確立という政治的企図にそいつつ、応詔歌をもって典礼の場に参与したものである。それは、おそらく持統朝よりはじまる殯宮時挽歌はいうに及ばず、従駕歌を中心とする雑歌においても認められることであった。

「万葉集」巻一の藤原宮御宇天皇代の雑歌が、天皇御製歌をもって始まるのは他の時代と同様であって当然のことともいえるが、そ

の次に「過_レ近江荒都_レ時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」を置くことは、「高市連古人感_レ傷近江旧堵_レ作歌」(三二)と並ぶものというばかりではなく、それが主題において、他ならぬ持統朝を築きあげる基盤であったところの天武天皇と壬申の乱の戦勝にかかわるものであるということによるとも考えられる。とりわけ、この長歌の作歌時期と事情について種々の論が提出されながらその問題解決に至っていないことをあわせてみると、作歌の場のいかに問わず最初に据えようとした編者の意図がかえって明らかになる。ことに、この歌が、巻一に収録された雑歌のなかで、その長大さにおいて画期的であるのみならず、枕詞で莊重性を付与された神話的な皇統譜をもって歌いはじめることなどにおいて、人麻呂作殯宮時献皇挽歌の結構とその企図の同一性を認めうると考えられる。

いずれもが天武天皇の壬申の乱に始まる事跡への持統朝の時点よりの回帰を主想とするものである。それは明らかに天武天皇に連なる持統天皇それ自体の皇統譜の正統たることを宣明することになる。しかも、この二首の長歌において天武天皇はそれまでの天皇とは異質ともいわれるほど飛躍的な性格をもっていることが推定される。すなわち、「天皇の_{すめらみ}神の尊の(巻一、二九)といい、「神ながら太敷きまして_{すめらみ}天皇の_{すめらみ}敷きます国(巻一、一六七)という、天皇の神格の強調は、とりわけ、「万葉集」の歌の詞句のなかでは

初見の「天皇すまみみ」という語の重さによっていよいよ増すことになる。「現在の天皇をオホキミ」というのに対して、主として、皇祖の天皇をいい、未来をも含めて広く、継ぎ来たり 継ぎ行く皇統そのものをもい⑧う」とすれば、まさに今、天武天皇が「万葉集」において初めて、人麻呂作献皇歌のうちに「天皇」の表現をもって尊崇されることの意味は大きい。天武天皇のうち立てた神聖な皇統は持統期にひきつがれていくのである。

近江荒都が持統期において天武天皇の原点への回帰と正統性の証左であるならば、吉野は、天武朝とその皇統の確立の中心とよべる地であった。したがって、持統天皇もまた、三年正月「辛未、天皇幸吉野宮。」とあり、つづいて八月、「甲申、天皇幸吉野宮。」とみえるなど、前後三十数回にもおよび吉野行幸がなされたのである。人麻呂の従駕歌がいつのものであるかは不明であるけれども、それが歌いあげようとするのは天武より継承する吉野宮とその主である現人神たる天皇への讃頌である。

人麻呂作雑歌が表明する天武・持統の神聖にして不可侵の皇統は、亡き日並皇子の事跡を媒介にして、軽皇子へと受け継がれていくべきものであった。「軽皇子宿干安騎野⑨」時、柿本朝臣人麻呂作歌⑩がそのような企図にもとづくものであることはいうまでもない。「したひまつる壬申の勝利者天武天皇（大海人皇子）は、壬申

の年六月には、吉野を進発してこの地を通過してゐる。そのときは、のちの持統天皇も同行、御子草壁皇子は十一才の少年として一行に加はってゐる。天武九年三月にはおそらくは狩獵かと思はれる行幸があり、また草壁（日並皇子）生前には、この地への狩獵があった。山間の別天地は、実は思ひ出の幾重にもかさなる思慕の地⑪であるという記述は、安騎野が三代にわたるゆかりの地であることを明らかにしている。そのような場に軽皇子に従って人麻呂の献じた歌は、ただ、「追慕であり、慰霊であり、軽皇子その人の心情のなかに祖先の霊の再来とその実現を期する祈りのやどされた」とするだけではすまされない、より現実に密着した意図がこめられているといわなければならない。

人麻呂作歌、ことに殯宮時献皇挽歌や従駕歌など、より長編化した長歌は、上述のごとく、壬申の乱を基点とする天武天皇の治積を讃頌し、その神聖な皇統が持統天皇さらに軽皇子へと継承されていくことの正統性を歌いあげていくことにおいて、明らかに政治的な企図が根底にあるということを集約的に示している。人麻呂の枕詞の多用と創造はそのような歌の場と目的と不可分に結合して形成されていると考えられる。

第Ⅲ表 献呈歌の中にみられる美的描写的枕詞

普通名詞(2)季節・時	普通名詞(1)生活・人事・自然	地名	伝統的枕詞	伝統的枕詞の改変	人麻呂創作枕詞
ぬばたまの 冬木成 夜 春	草枕 旅	ぬばたまの 夜床	194 挽長 45 雑長	たたなづく 青垣 ←	真草刈る 荒野 弱薦を 獵路
169 挽反 199 挽長	194 挽長	あかねさす 紫 ←	しきたへの 黒髪	記 30 194 挽長	あぢさはふ 目
ぬばたまの 夕 ← 夜	あかねさす 紫 ←	196 挽長 195 挽反	493	20 169 挽反 199 挽長 記 3	玉かぎる 夕 み雪ふる 冬
		196 挽長		45 雑長 199 挽長	

呪的・祭儀のないしは政治的な対象への讃め詞として機能する本来的な枕詞は被枕との関係が固定的に社会化されたものであって、意味は非実質化した慣用語として成立するものであった。人麻呂においてそれを「頌德的枕詞」とよんだ。それらに対し、歌全体の意味

人麻呂作献呈歌における枕詞

は、伝統的なものを改変したものと、人麻呂が創作した枕詞であり、伝統的であると思われるものはきわめて少数である。ここに自ずと歌の場と機能の変質にともなう枕詞そのものの展開をみるのである。しかもそれは必ずしも、いわゆる純然たる私的個人的な歌の

内容と密接にかかわるもので、意味の実質性を示している枕詞が人麻呂の献呈歌に存在している。これらはおおむね、被枕との関係は非固定的で、一首の歌のその箇所だけにおいて用いられる、一回性を示すものであり、とりわけ普通名詞を対象とすることを特質とする。そのような枕詞を第Ⅲ表に列挙する。

表にあげたように、この種の枕詞の大部分

なかにのみ認められるのではない。

皇子に献ぜられた挽歌は「やすみしし わご大王」という枕詞を起点とする莊重な皇統譜と、「神にまします」天子の威厳があったのに対して、「柿本朝臣人麻呂献_レ泊瀬部皇女忍坂部皇子_一歌一首并短歌」（卷二、一九四〜五）および、「明日香皇女木鹿殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」（卷二、一九六〜八）は、ともに「飛鳥の 明日香の河」の「玉藻」を起句として死者との再び帰ることのない生活を追憶するもので悲歌の色が濃いといえる。その意味で、「皇女をめぐる挽歌は私的に感情を述べる哀傷的挽歌」であろうという中西進氏の見解は妥当であるだろう。けれども、哀傷的挽歌が私的な形態をとるといつつ、これらも人麻呂が宮廷の要請に応じて献呈したであろうことは推しはかれる。そうだとすれば、事の本質は、人麻呂作殯宮挽歌がいかなる形態で宮廷に献呈されたのかということにかかわってこよう。それについて、「持統を中に据えて取巻く皇子・皇女たちの形成する社会、それをサロンのようなものに想定することが許されるならば、後宮ではなかつたか」という所論もある。記紀の類に載録されずに、しかも歌の集である「万葉集」にあることからしても、そのように殯宮挽歌をいわば準公的なものとすることもあながち否定すべきではないかもしれない。しかし、これは推測の域を出ないものであるならば、挽歌における哀傷的性

格、抒情性への傾斜の由来は、さしあたり他に求めなければならぬ。

人麻呂作の殯宮挽歌は、それぞれの時に応じて、舍人や従者あるいは妻などの個別的立場に位置する視座を通して歌いあげていくといふふう構成されている。しかも、その歌の主題を自らのものとすることを仮托された主体の内実を作りあげる意識はもはや古代心性にとどまっていない。人麻呂作歌の定立の冒頭に隣接する、「天皇崩之後八年九月九日奉為御齋会之夜夢裏賜御歌一首」（卷二、一六二）とされるものにもみうけられた「いかさまに 思ほしめせか」という句が、「死の意を暗示」することを見通して、これを「一つの熟語として挽歌に慣用された句で、特殊な陰影をもった言葉だったようだ。即ち『凡慮の慮りがたきよし』の背後に何か不安なはかり知れぬ懼れといったものがまといつた言葉である」と説いたのは杉山康彦氏であった。このような自らの内面に深く根ざす心情を歌いあげるにあたって、枕詞が歌の格調を高める要請をもってとり出されてくるときもはやそれは呪的な言語行為であることにとどまっていはいない。枕詞という儀礼的形態をとりつつ、その内実は、死の哀傷を歌いあげるといふ発想に密接に結合してくる。被枕そのものがより個別的・一般的なものになるとともに、それに冠する枕詞も、より描写的ないしは具体的内容をはらむ修飾的用法として展開

していく。枕詞が歌意そのものと不可分に一体となって、いうところの「意味の非実質性」という特質を失い、したがって、「固定的社会的慣習性」をも失っていく。そこには、明らかに枕詞の機能の展開と拡大が認められるのである。

以上のように、枕詞は描写的機能の獲得という方向に際だって変質していく。しかしそれは、枕詞の変質というだけではなく、むしろ、歌の方法それ自体の呪的発想から抒情的発想への展開のなかにおいてのことからである。枕詞もまた、歌の抒情的発想を高め深化させるという機能を果すものとなっていくのである。「図式的にいえば、抒情詩は個人の心に生起するよるこびや、苦しみや、あこがれや、哀しみなどの感情を、小宇宙として表わそうとする文学の形式であり、事件の発展や人間関係の図柄を描き出そうとする叙事文学とは対照的である。つまり、抒情詩は、外界を映しとろうとするのではなくそれを自己のなかに収斂しようとするわけで、その点それはまた共同体の歌謡ともちがう特性をもつ。」^⑧ という抒情的発想の胎動は他ならぬ人麻呂の生きた時代に確固たるものとしてあったといえよう。抒情詩成立の外側の理解は一応それでことたりよう。他ならぬ言語行為の一つである抒情詩の内面的生成は、土橋寛先生の説かれるごとく、「先呪術的なコトバの遊びが、呪術的・社会的な目的の喪失によって、新しく歌の世界に復活したものが抒情詩で

ある」とみることに於いて把握できよう。そこに於いて、枕詞もまた、その形式においては呪的言語行為としての讃め詞の発想を引き継ぎながらも、呪的な機能に基本性を置く場の目的と制約から解き放たれて、それが自らの内面的心情を表現せずにはやまない志向とあいまって、現実的な表現・描写へと再創造と機能の拡大変質を遂げていくことになるのである。

持統朝における天皇制の支配を貫徹しようとする、政治的共同体の宮廷儀礼の場は、その紐帯を呪的宗教的発想に媒介されながら、しかもそれを拡大変質せしめて、より多様な発想のうちに定着させたのである。人麻呂における枕詞の伝統の創造的回復もかかる筋道の上立ってのみ求められたし、また自らの欲求としてもあった。それは作歌の場と目的の全体にわたって貫徹することからであったが、本論の目標である枕詞についても同様のことである。人麻呂は伝統的な枕詞を用いはしたが、それをそのままに自らの歌に持ちこむよりは、改変を加え、より効果あらしめようとした。そしてその伝統再創造の志向は、枕詞の独自の創作、ことに抒情的・叙景的な歌における描写的・美的形容的なそれにおいて結実したのである。そこに人麻呂における枕詞形成の真髄をみることができよう。

註

① 「国語国文の研究」二九・三一号

- ② 大久保正氏「枕詞・序詞―回顧と展望」〔国文学解釈と鑑賞〕昭和三十年六月号）
- ③ ヨゴトと枕詞の関係については土橋寛先生「古代歌謡の世界」等参照
- ④ 上田正昭氏「日本神話の世界」
- ⑤ 土橋寛先生「古代歌謡と儀礼の研究」第四章他
- ⑥ 阿蘇瑞枝氏「宮廷讚歌の系譜」〔上代文学論叢〕
- ⑦ 伊藤博氏「挽歌の世界」〔国文学解釈と鑑賞〕昭和四五年七月）
- ⑧ 渡瀬昌忠氏「人麻呂殯宮挽歌の登場」〔国文学解釈と鑑賞〕昭和四五年七月）
- ⑨ 難波喜造氏「柿本人麿―その文学を支えるもの―」〔日本文学〕昭和二十七年十一月号）
- ⑩ 吉永登氏「万葉―文学と歴史のあいだ―」
- ⑪ 北山茂夫氏「万葉の創造的精神」
- ⑫ 「時代別国語大辞典」上代篇
- ⑬ 犬養孝氏「安騎野の冬」〔国語と国文学〕昭和四一年四月号）
- ⑭ 中西進氏「柿本人麻呂」
- ⑮ 橋本達雄氏「人麻呂と持統朝―後宮と挽歌―」〔文芸と批評〕昭和三九年三月、九月号）
- ⑰ 杉山康彦氏「人麿における詩の原理」〔日本文学〕昭和三二年一月）
- ⑱ 西郷信綱氏「日本古代文学史改稿版」
- ⑲ 土橋寛先生「古代歌謡の世界」